

助動詞 CAN の特異性

小 野 浩 司

Idiosyncratic Properties of Modal Auxiliary *Can*

Koji ONO

はじめに

いわゆる法助動詞が二つの意味体系に分割できることはよく知られた事実である。(1)の各文はそれぞれ能力、義務、意志、許可を表す根元的(root)用法であり、(2)の各文は命題内容の蓋然性に対する話者の査定を表す認知的(epistemic)用法である。

- (1) a. He can speak English.
b. John must/ought to/should meet him tomorrow.
c. I will write to you soon.
d. You may go home now.
- (2) a. It can't be true.
b. She left an hour ago. She must/ought to/should be at the office by now.
c. You'll be starving now after your long work.
d. She may be swimming in the pool.

本論ではとくに(2a)に示した認知的用法の can に注目し、それが他の認知的法助動詞とは違った特異な振る舞いを示すことをいくつか指摘する。その上で、この can の特異性がどこから生じるのかの説明を試みる。

1. 認知的法助動詞 CAN の特異性

まず、(2)において can のみが否定文の中に現れている点に注意する必要がある。一般に認知的用法の can は「はずだ」という日本語訳を与えられるが、しかし、その日本語訳からすると、「それは本当なはずだ」を表す It can be true. という文も英語として成り立ちそうである¹⁾。が、事実はそうっていない。「それは本当なはずだ」ということを英語で言うためには can を must に換えて、It must be true. としなければならぬ。このように、can は肯定文で「はずだ」を意味しないのである。問題は肯定文で「はずだ」を表さない can が否定文では使えて、「はずがない」という意味になる点である((2a) 参照)。事情は疑問文でも同じである。Can it be true? は「いったい本当だろうか」というのが通常の日本語訳であるが、can がもつ認知的意味を考慮してこの文を解釈し直すと、「それが本当なはずがあるだろうか」という意味になる。い

ずれにしても疑問文においても「はず」は含まれるのである。以上見たように、話者の命題（ここでは‘it is true’という部分）の蓋然性に対する査定を表す「はずだ」が、肯定文では許されず、否定文・疑問文では許されるのである。この点が can の第 1 の特異性である。

次にこれもよく知られた事実であるが、肯定文中の can は理論上 (theoretical) の推論を表すことがある (Leech 1987: 82)²⁾。

(3) This illness can be fatal.

(3)の意味はおおよそ「(これまでにこの病気で死亡した例もあるので) ここにいる患者もこの病気で死ぬことは理論上ありうるだろう」というものである。理論上の話であるので、このように医者から言われたとしても患者はそれほど心配する必要はない³⁾。このように理論上の推量を表しうる点が can の第 2 の特徴である。

第 3 の特徴は、can がもつ構文上の特徴である。認識的用法の can は it is possible で書き替え可能である。

(4) The road can be blocked.

(5) It is possible for the road to be blocked. (Leech 1987: 81)

一見なんでもない書き替えであるが、may, must, will の書き替えと比較すると can の特異性が明らかとなる。下の文の(7), (9), (11)が書き替え文である。

(6) I may be late coming home this evening.

(7) It is possible that I will be late coming home this evening.

(8) She must be sick.

(9) It is certain that she is sick.

(10) She won't be there.

(11) It is probable that she is not there.

It~that...の~にはいる形容詞の違いはさておき、それ以上に決定的な違いは、(5)では命題として不定詞構文をとり、(7), (9), (11)ではみな命題として that 節をとっている点である⁴⁾。

また can は it~that...の~の部分に現れることができない点で、may や must と異なる。

(12) *It can be that our team will win this time.

(13) It may/must be that our team will win this time.

さらに can はうしろに完了形をもつことができない。

(14) *Bill can have left yesterday.

(15) Bill may/must have left yesterday.

このように肯定文における認識用法の can は他の認識用法の助動詞とは異なる振る舞いを示す。しかし、問題をさらに複雑にしているのは、can が否定文あるいは疑問文のなかに使われると、その振る舞いが今度は他の認識的法助動詞と同じになってしまうことである。具体的には、否定文、疑問文において、i) can は(13)同様 it~that...の~のなかに現れることができること ((16), (17))、ii) (14)同様完了形をうしろに伴うことができること ((18), (19))、などである。

(16) Can it be that our team will win this time?

(17) It can't be that our team will win this time.

(18) Can't Bill have left yesterday?

(19) Bill can't have left yesterday.

次節では、can がなぜ上で述べたような特質をもつのかの説明を試みる。

2. Can の二つの用法

2.1. Must の対極としての can

Must は命題の内容を話者が確信している場合に用いられる。「～に違いない」という日本語を must に当てるのはこのためである。しかし、ただ単に「命題の内容を確信している」というだけでは must の本当の意味を理解していることにはならない。というのも、命題の内容を確信しているだけなら、「彼は学生でないに違いない (=彼は学生であるはずがない)」という意味で(20)のような文を言ってもおかしくないはずだからである。しかし、(20)は英語としては一般に容認されない⁵⁾。

(20) *He must not be a student.

認識的用法の must はモダリティの一種であり、(20)の not は must を否定することはできない。この not は命題 [he is a student] を否定しているのである⁶⁾。そうであるなら、(20)は(21)のように書き替え可能なはずであるが、書き替えを行なった(21)は(20)同様非文である。

(21) *It must be that he is not a student.

(21)が非文なのは英語に It must be that ... という構文が存在しないからではない (13)を参照)。(21)ひいては(20)が非文法的であるのは、それらの must が否定の命題をとっていることが直接の原因と考えられる。言い換えれば、must は肯定文をその命題としてとらなければならない法助動詞ということになる。しかし、本論ではさらに一步踏み込んで、must を用いることで話者が確信していることは、肯定命題そのものではなく、命題の肯定性(つまり、命題は肯定文でなければならないということ)であると仮定する。したがって、たとえば He must be a student.において、話者は「彼が学生であること」という肯定命題を確信しているのではなく、「彼が学生である確立が極めて高い」、あるいは逆から言えば「彼が学生でない確立が極めて低い」という命題の肯定性を確信していると考えるのである。(21)に話を戻すと、この文が非文なのは、命題の肯定性を確信している話者が、自らその命題を否定してしまっているということが原因であると結論付けることができる。

must を命題の肯定性の確信と仮定すると、その対極である命題の否定性の確信を表す法助動詞の存在が問題になる。本論ではそのような認識的法助動詞が can であると提案する。日本語で考えるならば、must は「～であるに違いない (=～なはずだ)」となり、can は「～でないに違いない (=～なはずはない)」となる。

1 節では、can't に「～なはずがない」という意味があるのであるから、can にも「～なはずだ」という意味があってもおかしくないという主旨のことを述べた。しかし、実際はそうっておらず、下の(22)のような文でもって「それは真実なはずだ」という意味を表すことはできない。そういう意味を表現したいならば、(22)ではなく、It must be true.という文を用いなければならない⁷⁾。

(22) *It can be true.

しかしここで、can をすぐ上で述べたように命題の否定性を確信する法助動詞であると仮定すると、(22)の非文法性は説明可能となる。なぜなら、この文において can を除いた部分(すなわち、[it is true]の部分)が命題であるが、そこにはたとえば not のような否定を表す表現が含まれていないからである。つまり、(22)は命題の否定性を確信する can の用法とは意味的に矛盾してしまうからである。

同様の説明は(12)、(17)の文法性の判断にも有効である。

(12) *It can be that our team will win this time.

(17) It can't be that our team will win this time.

認識用法の can は命題の否定性を確信している(すなわち、命題が否定されていることを確信している)

のであるから、肯定命題 [our team will win this time] を内に含んでいる(12)は必然的に不適格になる。一方、(17)は下の(23)のような意味をもつと考えることができる。そこでは命題が否定されており、命題の否定性を確信する can の用法とはなんら矛盾をきたさないの、適格な文となる。

(23) It can be that our team will not win this time.

さらに同様の説明は(14), (19)に対しても有効である。

(14) *Bill can have left yesterday.

(19) Bill can't have left yesterday.

(14), (19)はそれぞれ(24), (25)のような意味をもつと考えられる。

(24) It can be that Bill left yesterday.

(25) It can be that Bill did not leave yesterday.

(14)は(24)に示すように、肯定命題をとるので命題の否定性を確信する can とは相容れず、不適格となる。一方、(19)は(25)に示すように、否定命題をとっているの、ここで議論している can の用法と矛盾せず、適格文となる。

2.2. 論理的用法の can

前節では命題の否定性を確信する can の用法をみた。命題の否定性を確信するとは、逆から言えば、「命題の肯定性を最小限に確信する」という意味にも解釈できる。本節では、このような解釈が残された問題である(3), (4), (5), (16)に対する解決の糸口となることを論じる。

(3)は理論上の推論であった。

(3) This illness can be fatal. (この病気で死ぬことは理論的にはありうる。)

しかし、(3)がどのような意味をもつにしても、この文が前節で提示した説明の例外であることは明らかである。なぜなら、(3)には否定命題が含まれていないからである。命題の否定性を確信する can にとって最もふさわしい命題は否定命題だからである。

さて、この問題を解決するために、ここでは「命題の否定性を確信する」という can の役割を逆から捉えて、「命題の肯定性を最小限に確信する」と言い換えてみる。このように言い換えても、can が命題として否定命題をより好むという本論の基本的な考えには何ら抵触しないはずである。ただ、この言い換えによって can が肯定命題をもとりうるということが可能となった。つまり、今述べた「命題の肯定性が最小限である」というのは「命題の肯定性の否定」を意味する否定命題をさしているのではなくて、あくまで肯定命題をさしているのである。このように解釈することによって、can は can にとって好ましい否定命題ばかりではなく、好ましくない、あるいは正確には、とる確率が低い肯定命題をも命題として容認することが可能となったのである。

上では、can のもつ意味の一つとして「命題の肯定性を最小限に確信する」というものがあると仮定した。本論ではこの「最小限の肯定性」という部分をさらに極端まで推し進め（すなわち、肯定性ゼロということ、そしてその結果命題内容を否定も肯定もしないということ）、「命題内容を何の偏見もなく中立にみる」という点までこれを拡大解釈をする⁸⁾。ここで言う「中立」とは、話者が命題の肯定性あるいは否定性に対して言及を避けることを意味する。まとめると次のような図式になる⁹⁾。

(25) must ——— 肯定命題
 can ——— 中立命題
 ——— 否定命題

繰り返すが、中立とは命題に対して50%の確信をもっているということではない。命題の内容に対し、

話者自身が何らかの期待や確信を一切もっていないことを意味する。

本論では、このような「中立命題」を「理論上の可能性を表す命題」と解釈し直す。命題の内容が理論の上でのことであるので、そこに話者の認知的判断が入り込む余地はなく、それゆえ中立なのである。(3)の This illness can be fatal. という文はまさに can がもつこの中立性を具現化した例である。もし、話者が多少なりと命題内容の肯定性に重きを置きたいならば、(3)ではなく、may を使って This illness may be fatal. と言わなければならない(註(3)を参照)。

さて、ここで can が that 節ではなく不定詞節をとるという点に話を移そう。下の(5)は(4)を言い換えたものであった。

(4) The road can be blocked.

(5) It is possible for the road to be blocked.

他の法助動詞がみな that 節をとるということからすれば((7), (9), (11))、(5)はまさに特異な書き替えである。

この特異性を解明するためには、まず、that 節と不定詞節の違いに目を向けなければならない。明らかな違いは、that 節というのは定であり、不定詞節は不定であるということである。澤田が主張するように、定の節においては時制が確定しており、その分だけ「現実的」と言える。一方、不定の節は時制が確定しておらず「非現実的、非实际的」、もっと言うなら「理論的」である¹⁰⁾。そして、言うまでもなく今問題にしている can の用法も「理論的」ということであるから、このような can が定の節ではなく、不定の節を選択することは容易に推察できる。(4)が(5)のように書き替えられるのはこのような事情からである。

ここで文(14)にもう一度戻ろう。(14)の非文法性は、2.1.節では can が否定命題をとっていないという理由で説明された。

(14) *Bill can have left yesterday.

Can が肯定命題をとるときその命題が本論で言うところの中立命題であれば(14)は問題はないはずであるが、この文は中立命題をもたない。なぜなら、(14)は時制が過去であり、つまり時制が確定しており、中立命題がもつ「理論的」側面をこの文はもちあわせてはいないからである。

さて、最後に残った問題は文(16)である。

(16) Can it be that our team will win this time?

(16)の命題は否定されてないので、この can は must の対極としての can、すなわち命題の否定性を確信する can ではない。そうであるなら、この can はいま上で述べた理論上の推論を表す can ということになる。この点を踏まえて(16)を日本語に訳すと、「われわれのチームが今度は勝つということが理論の上においてもありうるだろうか(おそらくそんなことはないであろう)」となる。括弧のなかの日本語が示すように、この文は話者の疑念を表す一種の修辭疑問文である。いずれにしても、このような修辭疑問文的解釈を導くためには、(16)の can を理論上の推論を表す中立的な can と見なさなければならないであろう。

3. まとめ

本論では、認知的法助動詞 can がもつ特異性を観察し、その特異性がどこから生じるのかの説明を試みた。その説明の過程で本論では、can は認知的法助動詞 must の対極に位置する助動詞であると仮定した。具体的には、must は命題の肯定性を確信する助動詞であるのに対して、can は命題の否定性を確信する助動詞であると仮定した。さらに、can のもつ二次的・派生的用法として、話者の「命題への中立的態度」というものを考え、これにより can がなぜ理論上の推量を表すことができるのかを説明した。この派生的用法は、また、他の法助動詞が that 節で書き替え可能であるのに、can のみはその書き替えを拒否すること

に対する説明をも可能にした。

註

1. 「はず」は日本語においても話者の命題を査定する認識的法助動詞である。
2. 英語の can の認識的用法が常に「はずだ」という日本語で訳されるわけではない。認識的用法は広い意味でいえば話者の推量を表したものであるから、例文(3)のように「だろう」を用いて can を訳してもよい。
3. これに対し may は事実に基づいた (factual) 推量を表す (Leech 1987: 82)。たとえば(3)の can を may に置き換えて This illness may be fatal. とすれば、この文の意味は「(現在の患者の様態からして) この病気で死ぬかも知れない」という意味になり、これを聞いた患者は心穏やかではいられなくなるかもしれない。
4. (4)の文は It is possible that... のように書き替えることはできない。なぜなら、その書き替えは(6)の may の書き替えだからである。
5. 土屋 (1997) では must not の存在は認めているものの、その使用は「さまざまな制約を受ける」としている。これは要するに、must not の使用が marked な使用であることを示唆しており、本論ではこのような must not を議論の対象とはしない。
6. 認識的法助動詞はモダリティ表現の一種であり、これを否定したり、あるいはこれを質問の形で問うたりすることはできない(中右(1994)参照)。たとえば、I think that...における I think はモダリティの典型的な例であるが、これを否定して I don't think that...としても、not が否定しているものは think ではなく、that 節以下の命題部分である。下の(1)において [] は命題をさす。

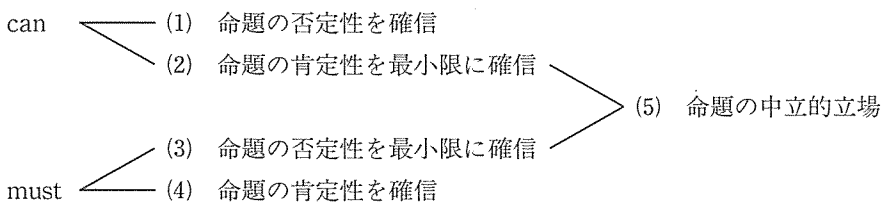
(1) I don't think [that he is honest].

= I think that he is not honest.

また、話者本人が行なった命題に対する査定を自らが問うというようなことは一般には許されない。下の(2)が意味的に不適切な文であるのはそのためである。

(2) ?? Do I think that he is honest?

7. ②の can は must の対極としての can、すなわち、日本語において「～なはずだ」に当たる can の意味として用いている。
8. Can の一般的な意味はあくまで「命題の否定性の確信」であり、ここで言う「命題内容に対する中立的態度」は周辺の用法である点に注意する必要がある。
9. Can に「命題の否定性を確信する」解釈と、「命題の肯定性を最小限に確信する」解釈の二つの解釈があるなら、can の対極である must にも「命題の肯定性を確信する」解釈と、「命題の否定性を最小限に確信する」という解釈の二つがあってもよいはずである。本論のように「命題の肯定性を最小限に確信する」という解釈を「命題への中立的態度」とするならば、下の表が示すように must がもつ「命題の否定性を最小限に確信する」という解釈も同様に「命題への中立的態度」となるはずである。



しかし、must の(3)の解釈が(5)になることはない。(5)は本文の後で述べるように、「理論的推量」を表

す解釈であるが、理論的推量が関与する文には否定命題は含まれておらず、したがって、(2)のように命題の肯定性を問題にするならよいが、(3)のように命題の否定性を問題にすることははじめから論外である。(3)の解釈が不可能な理由は、言語のもつ経済性からも説明できる。つまり、(5)の解釈をもたせるには can がもつ(2)があれば十分であり、同じ解釈を must の(3)にももたせる必要はない。「言語において無駄は極力省く」という原理がここでも成り立っていると言える。

10. 澤田 (1990), p.208を参照。

参考文献

- 小西友七 (編). 1988. ジーニアス英和辞典. 大修館書店.
- Leech, G.N. 1987. *Meaning and the English Verb*. Longman.
- 中右実. 1944. 『認知意味論の原理』. 大修館書店.
- 中野弘三. 1993. 『英語助動詞の意味論』. 英潮社.
- Ota, A. 1972. "Modals and Some Semi-auxiliaries in English," *The ELEC Publication* 9, 42-68.
- 澤田治美. 1990. 「認識的法助動詞の命題内容条件」『文法と意味の間—国広哲弥教授退官記念論文集』, 205-217. くろしお出版.
- 澤田治美. 1993. 『視点と主観性』. ひつじ書房.
- 澤田治美. 1995. *Studies in English and Japanese Auxiliaries*. Hituji Syoboo.
- Thomson, A.J. and A.V. Martinet. 1986. *A Practical English Grammar*. Oxford.
- 土屋裕樹. 1997. 「認識用法の must not」『英語青年』 Vol. CXLIII. No.6, 349.
- 安井稔. 1989. 『英文法を洗う』. 研究社.